

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

児童精神科医の育成，現状と課題

コーディネーター 前田 潔，森 隆夫

わが国の精神医療において児童精神科医の必要性は長く指摘されてきた。また精神科医，特に若い精神科医のこの領域への関心は高い。しかしながら現状は児童精神科医の育成および提供は必ずしも十分とはいえない。本シンポジウムは昨年から継続したもので，児童精神科医の育成に関する委員会が企画したものである。委員会設置の経緯を簡単にまとめると，2005年，厚労省に「子どもの心の診療医の養成に関する委員会」が設置され，2007年3月には委員会の報告書が完成した。本学会でも2006年新理事会の発足に伴って「児童精神科医の育成に関する委員会」が新たに設置された。このような背景の中，本シンポジウムは，児童精神科医を育成するために現状を分析し，課題を明らかにすることを目的に企画したものである。各発表はそれぞれの報告に譲ることとして簡単に各スピーカーの発表をまとめてみたい。

5名の方に話題提供をお願いした。最初の発表者の山内は本学会前理事長であり，先に述べた厚労省の検討会にも本学会を代表して参加している。山内による「子どもの心の診療の現状と問題点——全国大学医学部・医科大学における教育・診療の実態調査から——」では，現在わが国には児童青年精神医学会に約100名，小児神経学会に約1000名の学会専門医がいるという。児童青年精神医学会での専門医の数が極めて少ないが，これは学会員が専門医にあまり関心がないことが影響

しているという。また山内は昨年(19年)5月，全国学部長，病院長会議が行った児童の精神疾患に関する調査を紹介した。それによると90%を超える大学で子どものこころの診療に関する講義が行われており，時間数は3時間前後であった。学部教育では担当者は1~3名で，多くが非常勤であった。実習は52.5%で行われており，時間数は1~3時間であった。この数字は初期研修でもほぼ同じであった。大学病院ではほぼすべての大学で外来診療が行われており，80%近い大学で専門外来が開設されている。入院診療についても80%以上で行われている現状を報告した。

次に児童青年精神医学会理事長であり，都立梅ヶ丘病院という専門病院の病院長である市川宏伸による「児童精神科医からみた医師の育成の現状」と題して最近のこの領域の発達障害が増加しているという変化，およびこの領域の，保健，福祉，教育の連携が必要であるという特殊性などの報告があった。三番目には今春，その都立梅ヶ丘病院での研修を終え，群馬大学に戻った成田秀幸による「児童精神科専門病院での研修を経験して」という題で，わが国で数少ない専門機関都立梅ヶ丘病院での研修について報告があった。

信州大学附属病院子どものこころ診療部の責任者の原田謙は「子どものこころ診療部における専門医の育成」というテーマで大学病院児童精神科の研修の現状を紹介した。大学病院でも信州大学

のように診療部という形で子どもの心の診療をする大学が増えつつある。

最後に米国で児童精神医学のトレーニングを受けた六甲アイランド病院神経科の田宮聡は自身の経験に基づいて「アメリカ合衆国における児童精神科医育成プログラム」という題で米国における児童精神科医の養成について報告した。米国でも児童精神科医の不足が言われているという。

本シンポジウムではわが国における子どもの精神を見る医師が不足しており，社会的にもこの領域はニーズが高く，放置できない問題という認識のもとに企画された。本シンポジウムでは様々な背景を持つ発表者から興味深い意見をいただいた。本学会も関連諸学会と協力してこの問題に今後も取り組んでいくつもりである。
